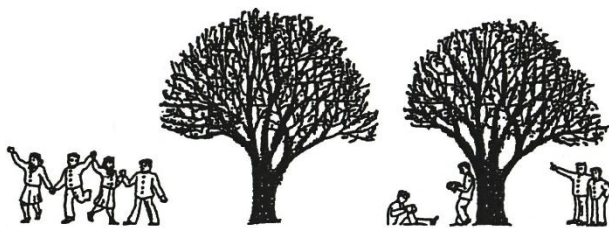


2本のケヤキ

第174号 (令和8年10月5日)



最近の自然災害について

～地震・雷・火事・親父?～

今年の夏は全国各地で地震や豪雨が相次ぎ、7月には太田市周辺でも大きな被害が出ました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。災害を他人事と捉えず、日頃の備えの重要性を痛感しております。

昔から災い(怖いもの)の象徴として「地震・雷・火事・親父」と言われます(現代では親父の並びに違和感を覚えますが…)。しかし現在の「雷」は、単なる落雷にとどまらず、ゲリラ豪雨や線状降水帯による「水害・土砂災害」と一体のものとして捉えるのが実的です。都市環境が変化した今、言葉の解釈も防災意識もアップデートが必要です。太田市防災マップによると、本校は蛇川西側に位置するため水害リスクは極めて低いとされていますが、万が一への備えは欠かせません。

本校では、生徒の安全を守るため次のような対策を行っています。

- 地震・火災対策:年2回の避難訓練や引き渡し訓練の実施、教室内の器具固定、避難経路の点検。
- 水害・荒天時の対応:登校前の危険判断による自宅待機や、下校時の校内待機・保護者引き渡しなど、状況に応じた安全確保を一斉メール等で連絡。
- 備えの強化:マニュアルの改訂、非常食やポータブル電源等の備蓄。

なお、生徒個人用の備蓄品は各学期末に消費期限を確認し、学期初めに補充しております。今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。



40年を振り返る①

～創立10周年記念誌より～

創立40周年を迎えるにあたり、過去の記念誌から本校の歴史を紐解いていきます。まずは「創立10周年記念誌」より、開校の経緯をご紹介します。

当時、県内の養護学校高等部は東毛地区に未設置だったため、高等養護学校の早期設置を望む声が高まっていた。なかでも交通の便に恵まれ、企業環境も整った太田市で熱心な誘致運動が展開され、昭和61年1月には太田市長らによる陳情書が県教育長へ提出されました。

こうした情熱が実を結び、県内初となる高等部単独校(知的障害)の設置が決定しました。県教委は全日制「産業科」を開設し、園芸・木工・窯業(陶芸、コンクリート)・家庭(被服、調理)の4コースを軸とする、全国でも12校目という新しい形態の学校づくりに着手したのです。

同年11月、太田高校内に開校準備室が設置され、飯島治之助初代校長をはじめとする4名の教職員が着任しました。12月にはさらに4名が加わり計8名となり、建設中の校舎での打ち合わせや備品の調達、教育目標・校訓・校歌・制服の決定、入試準備など、多忙を極めるなかで開校の基盤が整えられていきました。

そして昭和62年4月7日、1年生33名、2年生(編入)11名を迎え、第1回入学式が挙行されました。飯島校長は『挨拶・努力・自立』の校訓のもとで充実した生活をおく、立派な社会人になってほしい」と式辞を述べ、新入生代表も「先生の教えを守り、よりよい社会人になるよう一生懸命努力します」と力強く応えました。こうして、群馬県立高等養護学校の歴史の第一歩が踏み出されたのです。